

子ども好適空間の事例調査

実践例のアーカイブと、子ども好適空間デザインのための参考資料収集

佐善圭¹, 滝沢ほだか,² 野田美樹,² 町田由徳²

Kei Sazen¹, Hodaka Takizawa², Miki Noda², Yoshinori Machida²

[要旨] 本研究では、「子どもが安全・安心に過ごすことが出来る空間」「子どもにとって居心地の好い空間」「子どもが夢中になって過ごすことが出来る空間」の3要件を備えた「子ども好適空間」の先行事例を求めて、2018年1月から2018年11月の期間に13箇所の施設の訪問調査を実施した。

訪問調査の結果、「大空間と小空間の対比」「遊べる空間と寛げる空間の用意」「子どもの嗜好の違いに配慮した多様な空間」「温かみのある色彩、または照明の使用」「包まれ感がありつつ、他者と隔絶しない空間」「使用者自身により改善できる空間」といった要素を備えていることが明らかとなった。一方、問題点として気温や風向などの条件に適合せず使用が困難な空間、デザインが様式化し、広さや保育の実態に適合していない空間、死角が多く安全管理に問題がある空間、収納場所が乏しく保育室の片隅に物が溢れてしまっている空間なども見られ、子ども好適空間のデザインにあたっては、その空間で行われる保育の実態や敷地固有の条件を入念に把握し、使われ方の将来像を見越した設計が重要であることが明らかとなった。

[キーワード] 児童施設, あそび環境, 空間構成

[Key words] Child Facilities, Play Environment, Space Construction

[所属] 1 岡崎女子大学(Okazaki Women's University), 2 岡崎女子短期大学(Okazaki Women's Junior College)

1. 研究の目的

岡崎女子短期大学(以下:本学)では、「子どもが安全・安心に過ごすことが出来る空間」「子どもにとって居心地の好い空間」「子どもが夢中になって活動出来る空間」の3つの要件を備えた空間を「子ども好適空間」と名付け、「私立大学研究ブランディング事業」(以下:研究ブランディング事業)の取り組みとして研究、普及に努めている。

研究ブランディング事業では事業計画書の「(2)期待される研究成果」の一つとして、優良な空間デザインの実践例のアーカイブと、事例集の作成を目標としており、その実現のために岡崎女子大学、岡崎女子短期大学の研究者により事例調査チームを結成し、訪問調査を実施する事となった。

また、研究ブランディング事業の成果の集約として、子ども好適空間を具現化したケーススタディールーム「hyggeLab」を学内に設置する事を構想して

おり、「hyggeLab」デザインの参考資料を収集する事も目的の一つである。

2. 研究の方法

本研究では、造形教育、音楽教育、幼児教育・保育、環境デザインを専門分野とする研究者がチームを組み、一つの事例調査に対してなるべく多くの研究者が参加することにより、多様な視点から事例を分析する事を試みた。本稿では2018年1月から2018年11月までに調査を行なった13施設について報告する。訪問調査を実施した施設は以下の通りである。

- ・ふじようちえん(東京都立川市)1月27日
- ・東京ゆりかご幼稚園(東京都八王子市)1月27日
訪問者:佐善、滝沢、野田、町田
- ・青松こども園(愛知県豊田市)7月30日
訪問者:佐善、町田
- ・名古屋文化学園専門学校付属 名古屋文化幼稚園

(愛知県名古屋市) 9月11日

- ・勝川幼稚園 (愛知県春日井市) 9月11日
訪問者: 滝沢、野田、町田
- ・椋山女学園大学附属幼稚園 (愛知県名古屋市)
9月12日 訪問者: 町田
- ・鶴見大学短期大学部附属 三松幼稚園 (神奈川県横浜市) 9月22日 訪問者: 佐善
- ・野中こども園 (静岡県富士宮市) 9月27日
- ・大中里こども園 (静岡県富士宮市) 9月27日
訪問者: 佐善、野田、町田
- ・明福寺ルンビニー学園保育園、幼稚園 (東京都江戸川区) 10月12日 訪問者: 佐善
- ・こぼと絵本館 (岐阜県岐阜市) 10月18日
訪問者: 町田
- ・ゆかり文化幼稚園 (東京都世田谷区) 11月9日
- ・Ricoh Future House コサイエ (神奈川県海老名市) 11月9日 訪問者: 佐善、野田、町田

調査対象は、なるべく日帰りで調査可能な中部地方、関東地方の施設を対象とした。1月に最初の調査を実施する際、研究目的であっても前述の通り、一箇所の施設に対してなるべく多くの研究者が訪問する事を目指したが、日程の都合で複数の研究者が参加できなかった場合は、1,2名の研究者のみで訪問調査を実施している。

調査の方法として、訪問先では関係者にご案内いただき、施設の見学、説明を受けながら、同時に写真撮影を行った。通常のデジタルカメラを使用した撮影の他に、9月11日以降の調査では360度全天球型カメラ (Ricoh Theta) も併用して記録を行っている。

また、画像による記録の他に必要に応じて照度、寸法、気温の計測も実施した。

3. 調査結果

3-1. ふじようちえん (東京都立川市)

ふじようちえんは、東京都立川市の昭和記念公園の近隣に立地している。敷地面積は 6,743 m² (約 2,040 坪) で、1階建、楕円形の特徴的なプランは幅広いメディアで紹介されており、グッドデザイン賞、キッズデザイン賞金賞、日本建築学会賞、日本建築家協会賞、他多数の賞を受賞し、国内外で知られている現代幼稚園建築を代表する存在である。

園舎のコンセプトを立案したのは、園長の加藤積

一氏と本園のブランディングを手がけるアートディレクターの佐藤可士和氏であり、設計を手掛けたのが手塚貴晴・由比夫妻の(株)手塚建築研究所である。

園舎はメインとなる前述の通り特徴的な楕円形の平面形状を描き、屋上テラスは木材のデッキとなっており、一部に採光用のトップライトが設けられている。実際に現地を訪れて感じたことは、屋上が地表面の園庭と隔絶されておらず、連続的な空間として作用しているという点である。屋上面は常識的な建築物よりも階高を低く抑えて地表面と近接させると共に、滑り台や複数の階段で屋上と地表面を接続させることにより、両者の距離感を近づけている。また、低い屋上を実現させるために、天井高は 2,100mm に抑えている。また通常は天井裏を通る空調のダクト類も床下を通すなどの工夫により屋上を低くしている。

保育室は壁ではなく可動式の棚により仕切られており、発表会や入園、卒園式等のイベントでは棚を動かすことにより大空間を確保している。この間仕切りの構造により、保育室では隣の部屋の音が常に聞こえてくる状態であるが、加藤園長によると、子どもは自分の作業に集中している時には隣の音は気にしない、とのことであった。照明器具は現在では珍しい、耐震型白熱電灯の裸電球が天井に設置されており、訪問当日は雪の残る大変寒い日であったが、室内は温かみのある雰囲気を出していた。照度は自然光の入らない室内では、150~200 lx 程度と幼稚園としてはやや暗めであったが、自然光の入る室内においては 500~1,000 lx 程度が確保されていた。

建物や家具、水道に至るまで、こだわりや美しさへの追求が感じられ、多用途に使える箱型の椅子など特徴的なデザインの家具も並んでいた。訪問日が土曜日であったため、子どもがどのように環境に関わっているか観察することはできなかったが、モンテッソーリ教育を基本としていることを謳っている。

子どもの音環境としては、サウンドスケープを意識して建物が設計されている様子が伺えた。サウンドスケープ (soundscape) とは、サウンド (音) とスケープ (〜の眺め) の複合語であり、視覚的な風景であるランドスケープに対して「音の風景」を意味する造語である。この概念はカナダの作曲家マリー・シェーファーが 1960 年代に提唱し、世界各国

に広がった。音環境をひとつの風景として捉える考え方は、「ししおどし」などに代表される日本の伝統文化における音の思想に通じるものとして、日本でも各地で取り入れられている。

ふじようちえんにおいては、雨水の通り道がサウンドスケープを意識して設計されていた。屋根に溜まった雨水は、雨樋を通して数カ所に集まるように設計されており、一部の樋は地面まで続いておらず、屋根から雨水が滝のように落ちる仕掛けが作られていた。その下には水受けが用意され、落ちてくる雨水だけでなく、空から降る雨が直接水受けにたまり、そこから派生する音を楽しむような工夫が特徴となっている。園の先生に子どもたちの様子を伺ったところ、水受けが奏でる音の様子から、雨をどのような容器で受けると、どんな音が鳴るかということに興味が高まり、さまざまな容器で雨を受けて音を楽しむ姿が見られたとのことであった。

3-2. 東京ゆりかご幼稚園（東京都八王子市）

東京ゆりかご幼稚園は、JR 横浜線八王子みなみ野駅から、車で5分程の武蔵野の傾斜地に立地している。園舎の敷地面積は21,975 m²（6,700坪）、建築面積は1,856 m²（561坪）の豊かな自然環境を背景に、自然と関わりながら生きる力を育て、子どもの主体性を尊重し、調和のとれた教育をモットーにしている。

園舎設計は都内を中心に多くの幼稚園、保育園の設計を手掛けている渡辺治建築都市設計事務所によるもので、恵まれた敷地の広さを活かして、木造2階建の園舎がV字型に直線的に配置されており、廊下の長さは直線で100m近くにも及ぶ。園舎は「キーラムメガビーム」と呼ばれる強固な集成材の梁を使用した、柱の少ない大スパンの空間が特徴であり、園舎の形状は本学付属の「第二早蕨幼稚園」にも似た形状であるが、それと比較してより「大きい、広い、高い」空間という印象を受けた。

園庭には、5つの自然体験ゾーンを設け、キッズデザイン賞2016最優秀賞「内閣総理大臣賞」や「全国学校園庭ビオトープコンクール」2017「日本生態系協会賞」などを受賞している。

訪問日当日は、前日に振った雪の影響もあり、園庭は約30cm以上の雪で覆われていた。園長の内野彰裕氏は、筑波大学大学院後期課程に在籍し、ビオトープの研究者でもあり、教育に熱心で、意見交換しながら楽しい時間を過ごすことができた。

自然溢れる素晴らしい環境の下で、外遊びを中心に全てのことを学ぶというスタイルの教育方針である。室内には園庭で見つけた枝の絵が描かれていたり、園庭で採った花の種が画用紙に貼られ、数量を書き入れてあったり、ピザの焼ける窯が園庭に設置され、食べる場所も園庭に整えてあった。

子どもの音環境としては、音に関わる仕掛けが特別に作られているわけではないが、広大な自然を活かした園庭からは動物たちの鳴き声や、水の流水音など、自然から発生する多種多様な音が聴こえてきた。都市の中の幼稚園や保育所では車や人工物の音が溢れ、自然の音にのみ耳を傾けることは実質的には困難である。しかし、東京ゆりかご幼稚園では広大な敷地と豊かな自然に囲まれ、園舎自体はサウンドスケープを意識した設計がなされていなくても、身の回りにある音から表現につながる様子が具体的にイメージできる園であった。

3-3. 青松こども園（愛知県豊田市）

青松こども園は豊田市朝日ヶ丘の神竜寺に隣接するこども園で、敷地面積は5,712.5 m²（約2,040坪）、園舎の建築面積は2,449 m²（約741坪）、鉄筋コンクリート造の2階建て、岡崎市の小林清文建築設計室の設計により、2013年に園舎が竣工した。

園舎、園庭は丘の頂上付近の傾斜地を活かした設計となっており、1階に3歳～5歳児の保育室、2階に0～2歳児の保育室と遊戯室、厨房、職員室等が配置されており、1階北側は丘にめり込むような半地下の構造で、2階は北側にセットバックし、2階建ながらも建物の全高を抑え、環境と一体化するようにして景観に配慮した建築となっている。

外装、内装とも壁は白色で、内装は木製の下見板が貼られていた。1階は半地下であるが、保育室の天井にはトップライトが設けられており、廊下も吹き抜けで自然光が2階から1階に降り注いでくるように工夫されており、園舎内が自然光により明るく保たれているのが印象的であった。

ホールとしても使われる遊戯室には、発表会での観客の視点に配慮したロフトが設けられており、廊下と遊戯室を仕切る壁は解放できるようになっているなど、多用途な使い方に配慮した設計となっていた。また1階廊下にはクライミングウォール、レゴブロックのコーナー、図書のコーナーなどが設けられ、廊下が遊びや寛ぎのスペースとして使用できるように配慮されていた。

園庭には園児の膝下程度の水位の池と小滝が設けられ、水遊びに興じることができる。大型の水盤から流れ落ちる小滝は、滝の裏側をくぐったり、滝壺で水遊びをしたりする事もでき、子どもをワクワクさせる仕掛けが満載の園庭であった。園庭の傾斜地を降りた池の下流にはビオトープが作られており、2017年には「全国学校・園庭ビオトープコンクール」において「日本生態系協会賞」を受賞している。

3-4.名古屋文化幼稚園（愛知県名古屋市）

保育者養成校である名古屋文化学園保育専門学校に隣接して建設された幼稚園である。専門学校を含めた敷地面積は6,609㎡（約1,999坪）で、幼稚園の建築面積は2,356㎡（約713坪）、鉄筋コンクリート造と鉄骨造が併用された地上3階建の園舎である。

園舎は2012年に（株）環境デザイン研究所の設計により竣工しており、理事長の加藤紳一郎氏が後述する「勝川幼稚園」の理事長、伊藤聡氏らと共に、神奈川県「ゆうゆうの森幼保園」を見学した際にその園舎環境を気に入り、「ゆうゆうの森幼保園」を設計した環境デザイン研究所に設計を依頼したとのことであった。

設計の特徴として、専門学校と幼稚園が中庭と2、3階のブリッジを介して接続されており、簡単に行き来ができることと、幼稚園の敷地をぐるりと一周するように「スカイサーキット」と呼ばれる1周200mの大型のテラスが巡っている点が挙げられる。

「スカイサーキット」は仙田満氏が提唱するあそび環境の構造である「遊環構造」を体現しており、子ども達の遊び場であると同時に、2階の保育室とも接続され、避難経路としても活用できるようにデザインされている。

名古屋の都心部にありながらも、広い敷地内の園舎は、室内プールなども含まれる建物と自然溢れる園庭で構成されており、駐車場から大型の消防車が入れることや各保育室からの避難通路が2方向確保されていることなど、危機管理の徹底と専門学校（保育者養成校）との併設を生かした、学生と子どものふれあいの動線の工夫など、新しい視点を学ぶことができた。

子どもの音環境としては、名古屋の中心部にあるにも関わらず、園の周りには緑もありとても環境が良く、園内では外を走る車の騒音等が気になることは

なかった。専門学校とは中庭を挟みゆるやかにつながっていることから、お互いの気配を邪魔にならない範囲で音でも感じることができるよう配慮がなされている様子が伺えた。

3-5.勝川幼稚園（愛知県春日井市）

愛知県春日井市の住宅地に位置する幼稚園である。敷地面積は1,981㎡（約599坪）、建築面積は710㎡（約215坪）の鉄筋コンクリート3階建てで、（株）環境デザイン研究所の設計により2009年に竣工した。施工を担当したのは岡崎市の小原建設（株）で、同じく岡崎市の岡崎製材（株）が造作家具の制作を担当している。

園舎は、旧園舎の時代から立っている楠の大木を中心として放射状に伸びる平面構成を採用している。そのため保育室やホールは台形の平面を描いており、階段や廊下も円弧を描く平面が多いなど、複雑な空間構成となっているため、小規模な敷地に対して実際以上に広く感じさせるような空間であった。壁は内壁、外壁とも黄色で塗装されており、黄色の壁は環境デザイン研究所設計による「椛山女学園大学附属幼稚園」や「岡崎げんき館」の内装でも見られる特徴であるが、内壁、外壁とも黄色となっている例は珍しい。

園舎の中心にある大木とその周りを取り囲むように配置されたネット遊具の上で、木に見守られながら自由に転がって遊ぶ子どもたちの姿が印象的であった。更に、大木を囲むような配置の園舎から、設計の段階からイメージを膨らませていたことをお聞きした。限られた敷地の中で、いかに子どもたちが豊かな気持ちで生活できるか、また、歴史ある園をこの場所で守っていききたいという熱意が感じられた。保護者の協力や理解の大きさも保育に生かされているようだった。

子どもの音環境としては、住宅街のため外からの騒音は聴こえないが、すぐ近くに個人宅があることから音の問題には気を使っていると理事長先生からお話を伺った。教室は画一の形ではなく、ある教室は中庭に出ることができ、ある教室は吹き抜けて天井が高い、またある教室は台形となっているように、教室によって音環境も異なる様子が伺えた。担任の先生方は与えられた教室の環境を最大限に保育に活かしているなどの工夫が随所に見られたことが印象的であった。

3-6. 椋山女学園大学附属幼稚園・保育園（愛知県名古屋市中区）

椋山女学園大学附属幼稚園は、2014年3月に(株)環境デザイン研究所の設計により現在の園舎が竣工した。敷地面積は3,486㎡(約1,055坪)、建築面積は1,122㎡(約725坪)である。

同学園の椋山女学園大学附属小学校、中学、高等学校にも近い、名古屋市覚王山の住宅街に位置する都市型の幼稚園・保育園であり、バス通園や保護者の自家用車による送迎は行われておらず、園児は徒歩、または保護者の自転車にて通園している。

園舎は鉄筋コンクリート造の3階建てで、1階が0～2歳児の保育園、2階に幼稚園の保育室が設けられており、3階はランニングコースを備えた空中庭園である。1周100mのランニングコースは「遊環構造」を直接的に反映するデザインであり、園庭を補完する施設となっている。またランニングコースの周囲には植栽やベンチ状の設えがなされ、運動のスペースであると同時に休息できるスペースともなっている。

室内空間は中央部に2階から3階を繋ぐ大きな吹き抜けが設けられているのが特徴であり、吹き抜けにはネット遊具が張られ、子どもたちが屋外に出ることができない雨の日にも、遊ぶことができるスペースとなっている。また、吹き抜け横には環境デザイン研究所設計の施設で多く見られる塔状遊具が設けられている。

園舎を特徴付ける要素として、本園には常設の「ホール」が設けられておらず、ホール兼大廊下である「すぎのこホール」と呼ばれるスペースが1階に設けられている。また、「すぎのこホール」の背後には屋外の園庭につながる大階段があり、大階段を舞台として活用することもできる。

園長の山中文先生、教頭の飯田恵先生にお話を伺った所、園舎デザインの際には、特に悪天候時にも屋内での遊びができる園舎を強く要望したとのことであった。1階の「すぎのこホール」以外に2階の廊下も幅が広く取られており、子どもたちにとってこの広い廊下は交流のスペースや、休息のスペースであり、また保育者にとっては造形活動等を行うことの出来るスペースとなっており、好適な室内空間として機能しているように見受けられた。

同じ「環境デザイン研究所」がデザインした前述の名古屋文化幼稚園、勝川幼稚園では、両理事長が「収納スペースがもう少し欲しかった。」と語って

いたのに対して、本園では保育室等に多くの収納スペースが設けられており、収納に不満はないとのことであった。これは設計時に勤務していた保育者達が「主婦目線」で要望した結果とのことであり、訪問調査を実施した園の中でも、特に整理整頓が行き届いていたのが印象的であった。

3-7. 鶴見大学短期大学部附属 三松幼稚園（神奈川県横浜市）

J R鶴見駅より徒歩5分に位置する曹洞宗大本山總持寺の敷地内にある、学校法人総持学園が運営する鶴見大学短期大学部附属の幼稚園である。

寺域15万坪の自然豊かな環境の中に、幼稚園の敷地面積、3555.97㎡(1,076坪)、園舎の建築面積は、1960.51㎡(593坪)で、地上2階鉄筋構造となっている。

幼稚園の入口ホールには、釈迦の誕生を描いた巨大なタイル壁画で飾られ、保育室や廊下には神奈川県内の桧材が多く使われている。

園舎前の園庭には、土が盛られた小山があり、子どもたちが、水を流して遊んだり、滑り降りたりしていた。また、園庭には、巨木の切り株が設置され、自然の遊具として子どもたちが遊んでいる姿も見られた。

また、この園の特徴は、鶴見大学短期大学部の仙田考先生が設計から携わった、裏庭の傾斜地を生かした第二園庭を持つことである。大ホールから木製の螺旋階段状の構造物が設置され、眼下の斜面に降りることができる。螺旋階段にはめ込まれた色とりどりのアクリル板からは、様々な光が照射され、異空間へ誘う空間構成がなされ、また、子どもの興味をそそり、バランス感覚を育むネット(綱)遊具の仕掛けなど、細かな配慮や工夫がなされている。緑に囲まれた保育環境の中で、建学の精神である「禅の精神」にもとづいた教育が行われ、年長児になると、總持寺の僧侶の指導による坐禅も教育に取り入れられている。

3-8. 野中こども園（静岡県富士宮市）

野中こども園は、富士宮駅の南方2kmほどの距離にある、富士山の裾野に位置するこども園である。かつては1972年に建設された「野中丸」、1981年に建設された「野中ザウルス」という2つの特徴的な園舎を有し、(株)環境デザイン研究所の代表作として幅広く名前を知られた園である。現在は「野中

丸」が耐震性の関係などから2017年に建て直され、新園舎となっている。

敷地面積は11,085㎡(約3,353坪)と広大で、園舎は新園舎、「野中ザウルス」共に鉄骨造の2階建である。新園舎は鉄骨造ながらも内壁や床、デッキテラス、建具、庇などに木材が多用され、一部の保育室には畳敷のお昼寝スペースも設けられるなど、温かみのある、家庭的な雰囲気の間となっていた。室内には2階にロフトが設けられているが、現在は暑さのため倉庫として使用されているのみである。デッキテラスにはベンチが多数配置され、屋外で遊んだ子ども達が休息を取れるように配慮されているとのことであった。

一方、1981年に建設された「野中ザウルス」は新園舎とは対照的な、活動的雰囲気の空間であった。内装は白をベースに青、赤、黄、緑の高彩度の原色で塗装され、保育室と廊下の天井は2層分の吹き抜けの広大な空間である。保育室北側に設けられた中二階の「キャットウォーク」は、階段や登り棒で子ども達が登り降りすることができ、キャットウォーク下部には小部屋が設えられている。保育室間の壁は開放して大部屋として使用することもでき、現在は動かなくなっているが、天井の天窗やカーテンを滑車で操作できるようになっているなど、多彩な仕掛けが用意されており、いわば「遊びの工場」と呼べるような独特な空間であった。現代の園舎建築ではなかなか見られない大胆なデザインに、強い印象を受けた。

広々とした敷地内には個性的な遊具や手作りの遊び場が整えられていた。子どもたちは大いに、伸び伸びと身体を使って遊ぶことができる環境である。ダイナミックな遊び場に、思わず安全面が心配になってしまうほどだった。子どもの主体的な遊びを保障しながらも安全面にも万全を求めていくことの必要性を改めて追究していきたいと感じた。

3-9.大中里こども園(静岡県富士宮市)

元野中こども園園長をしていた塩川寿平氏が、名誉園長を務めている。大中里こども園は、公立園であったが、現在は私立園として経営されている。

元が公立園であったという歴史から、園舎は鉄筋コンクリート造1階建の単調な箱型であり、園庭面積も狭いが、園庭に園長自らが手作りした遊具を配置したり、園庭中央部に植栽を配置したりするなど、子どもが自由に遊環構造的に楽しく遊ぶことがで

きるように配慮されていた。通常は園庭の隅に配置されることが多い雲梯やのぼり棒なども、園庭の中心に移動されており、子どもたちの様々な遊びの様々な場面で、子どもたちがそれぞれの価値観で見立てて利用したり、目的を加えて遊びに取り入れたりしていた。隅に配置されているより、明らかに遊具を使用する頻度が高くなっている。園庭の中心にあっても、少しも遊びの妨げになっていなかった。思い込みや常識を覆す楽しさを感じた。

著名な建築家やデザイナーに依頼しなくても、保育者達の手による「リノベーション」で環境を変えられることができるという好事例であった。

塩川氏は静岡県立大学教授を務められた保育の専門家でもあり、日本保育学会倉橋賞、こども環境学会論文賞なども受賞されている。

3-10.明福寺ルンビニー学園保育園、幼稚園(東京都江戸川区)

宗教法人明福寺本堂に隣接した同一敷地に、保育園・幼稚園を併設する一体型保育施設である。近年老朽化した園舎の建て替えが終了し、月刊建築誌の「新建築6月号」に、「特集：保育施設の役割」の一事例として掲載された。

園舎の敷地面積は、2275.69㎡(688坪)、書院1787.88㎡(540坪)、園舎面積は、880㎡、地上2階鉄筋構造である。整備間もない園舎は、清潔感もあり、園庭に面したガラス扉から採光される明るい室内である。

保育所は、1歳児25名、2歳児25名、3歳児25名、4歳児29名、5歳児29名、幼稚園は、3歳児から5歳児まで各学年60名の総園児313名が収容されている。

特徴としては、保育室はオフホワイトで統一され、園庭側のサッシ扉を開け放つと、屋内と屋外が一体化した広い空間が生まれ、天井から自然光が差し込む開口部や吹き抜けの空間は、温かく、優しい雰囲気を感じた。

保育プログラムも多彩で充実しており、訪問日当日に開催していた造形活動は、美術大学の講師らが、専門的な指導を行ない、子どもたちも真剣に取り組んでいた。本施設の特筆すべき点は、降園後も子どもや保護者の多くが、日の暮れるまで園庭に残り、駆け回り、遊びまわる子どもを見守りながら雑談をする姿であり、園が地域の中心となり、あたたかな空間がコミュニティーに溶け込んでいることに感

心した。

3-11.こぼと絵本館（岐阜県岐阜市）

こぼと絵本館は、岐阜県岐阜市の「こぼと幼稚園」に隣接して建設された、絵本、児童書専門の図書館である。(株)環境デザイン研究所の設計により2005年に竣工し、グッドデザイン賞、中部建築賞などを受賞している。

建物は木造2階建てで、屋内空間の中心には「ブックタワー」と呼ばれる木造の塔が設えられており、塔の下部は貴重書の展示コーナー、上部は書架と読書スペースが設けられている。

本施設は敷地面積が670㎡（約203坪）、建築面積が270㎡（約174坪）と比較的小規模であるが、広い空間、狭い空間、高い空間、低い空間、明るい空間、暗い空間と、多様性に富んだ空間が設えられているのが特徴である。

前述の「ブックタワー」上部は「めまいスペース」と呼べるほど高さを感じさせる空間であり、天窓に近いため照度が床上で628lxと大変明るくなっていた。それに対してブックタワー下部は床上で56lxと大変暗く、「洞窟的」な空間となっている。

他にもカーテンにより周囲の空間と隔絶して本を読むような工夫や、子ども用の狭い階段、回廊により室内を巡って楽しめるような仕掛けなど、訪問調査当日も園児達が施設を利用していたが、子ども達がそれぞれ自分のお気に入りの空間を見つけて、読書に没頭できる多様な空間を用意しているのがデザイン上の特徴であった。

3-12.ゆかり文化幼稚園（東京都世田谷区）

ゆかり文化幼稚園は、成城学園前駅から徒歩10分程度の閑静な住宅街に位置し、建築家丹下健三氏が1967年に建築した初の幼稚園建築である。

建物は、南斜面の勾配を利用し、園舎の敷地面積は3,030㎡（約917坪）、建築面積は1,320㎡（約399坪）で、3層の階段状にレイアウトされた波型のプレキャストコンクリートが放射状の構造が組み上げられ、機能的造形美に優れ、半世紀以上前の建物とは思えないほど、モダンな特徴を持つ。

主となるプレキャストコンクリートの構造をはじめとして、建具や家具類のほとんどが既製品ではなくこの幼稚園に合わせて作られたものであり、アプローチのコンクリート製のブリッジなども凝ったテクスチャが施されるなど、現代では再現が不

可能ではないかと思わせる様な、非常にコストのかかった作りである。室内外は白色で塗装されているが、一部のトップライト部分に青や黄色の原色で塗装されている部分が見られた。

トップライト周囲を高彩度の色で塗装する手法は、丹下健三が影響を受けた後期のル・コルビュジェの建築にも見られる手法であるが、この塗色の存在は長年の汚れの堆積により忘れ去られており、近年になって、アスベストを取り除く大改修を行った際にオリジナルの塗装が発見され、復元されたものとのことであった。

保育室の間は回廊のような小部屋や天井が開放された室内空間、全面ガラスの採光ができる遊戯室など、変化に富む室内空間が園の保育形態に生かされている。保育室では、子どもが主体的に造形活動を行い、室内には成果物といえる、子どもたちの造形作品、絵画、巨大な粘土による彫刻作品などが点在していた。

歌、踊り、オペレッタなどの音楽教育にも力を入れており、録音室やグランドピアノも随所にあり、各教室に備えられているピアノなど一般的には見られない充実した設備が整っていた。

ゆかり幼稚園の教育理念が反映された造形教育や音楽教育を進める環境の中で、子どもたちが主体的に活動する姿が印象的だった。

また、園庭にある斜面には、樹木が茂り、子どもたちが、その間を駆け回る姿を見て、運動能力の向上に最適であると感じた。理事長、園長の藤田厚生氏の話では、本園の建設に当たっては、丹下健三本人が園との入念な打ち合わせと調査を基にデザインを進めたとのことであり、本園は丹下の隠れた傑作であると言えよう。

3-13.Ricoh Future House コサイエ（神奈川県海老名市）

「コサイエ」は、(株)リコーの関連施設であり、平日は学童保育、休日は科学教室として運営されている。運営会社は「キッズニア東京」など、こどもの体験施設をプロデュースしている(株)UDSである。

海老名駅から徒歩5分のビル「Ricoh Future House」3階にあり、120坪ほどの空間には、宿題をする場所、おやつを食べる場所、本、漫画を読む場所、ゲームをする場所など、様々なコーナーが準備されている「コサイエラウンジ」と、それを取り囲

むように配置された3つの「ラボ（実験室、工房、教室）」、屋外テラスから構成されている。

学童保育と言っても、子どもが主体的に過ごす楽しさが味わえるようにサポートするようなプログラムが提供されており、スタッフは学習や遊びのサポートをするものの、「宿題をやりなさい」など、活動の強制をすることはないとのことであった。当日は30名ほどの児童が思い思いの活動に取り組んでおり、児童の数に対してゆとりのある面積が確保され、非常に静かな空間であったのが印象に残った。

照明は「ラボ」では通常の学校の教室と同じ様な、照度の高い白色の管状LEDが用いられているのに対して、中心部の「コサイエラウンジ」では照度を抑えた電球色のLEDダウンライトが用いられ、明るい空間と暗めの空間のメリハリをつけることにより、学びのスペースとくつろぎのスペースの両立を図る工夫がなされていた。

入会金、年会費（月会費）も必要であることから、アフタースクールとして、学童保育と塾の要素も含まれていると感じた。

4. 訪問調査から発見された「好適空間」要素のまとめ

以上の13施設を訪問し、発見できた「子ども好適空間」を構成する要素として、以下の要素が挙げられる。

- 1) 大空間と小空間の対比
- 2) 遊べる空間と寛げる空間の用意
- 3) 子どもの嗜好の違いに配慮した多様な空間
- 4) 温かみのある色彩、または照明の使用
- 5) 包まれ感がありつつ、他者と隔絶しない空間
- 6) 使用者自身により改善できる空間

「大空間と小空間の対比」については、大きな空間の体験は子どもを活動的な気分させ、走り回ったり、飛び跳ねたり、といった行動を誘発させる。一方、小さな空間は一人きりになったり、隠れたり、少人数で秘密を共有したり、といった活動を誘発し、子どもたちの行動のきっかけ作りとなる空間として準備される必要がある。また、「遊べる空間と寛げる空間の用意」については、遊びの空間のデザインを考慮する一方で、座れるスペースや寝転がることのできるスペースなど、「動と静」のバランスに配慮した空間作りのデ

ザインが必要であろう。

「子どもの嗜好の違いに配慮した多様な空間」は、明るい空間と暗い空間、高い空間と低い空間など、子どもたちの嗜好の違いや遊びのシーンに応じた多様な空間を用意することで、それぞれの「好適空間」を子どもたちが発見することができる。「こぼと絵本館」は特にこの要素に配慮された空間であった。

「温かみのある色彩、または照明の使用」については、細かな作業を要する造形活動等については室内には明るい照明が必須となるが、一方で子どもたちが休息し、寛ぐためには暗い照明が適している場合がある。また色彩について、子どもを活動的な気分にするためには高彩度で対比の強い配色が適しているが、落ち着かせるためには、対比の強すぎない色彩が求められる。この点においても「静と動」の要素に配慮したデザインが求められる。

「包まれ感がありつつ、他者と隔絶しない空間」については、「ゆかり文化幼稚園」を訪問した際に「ここは居心地が好い」と全員が一致して感じられた空間が存在した。そこは「半屋内」スペースで雨からは守られながらも屋外の空気や光を感じることができ、曲面の壁に囲まれた小さな空間ではあったが閉塞感は少なく、上の廊下からは見下ろすことができ、他の園児や保育者とのつながりを感じることができる、といった空間であった。

「使用者自身により改善できる空間」については、空間が使用される中で、設計者の意図しない問題点が表出したり、保育のあり方の変化により、デザインが適合しなくなったりといった場合に、オリジナルのデザインを尊重しつつも使用者自身がより好い空間へと改善できる余地があるか、といった要素である。

5. 訪問調査から発見された「子どものための空間」の課題点のまとめ

一方、訪問調査の中では、気温や風向などの条件に適合せず使用が困難な空間、デザインが様式化し、その場の広さや保育の実態に適合していない空間、死角が多く安全管理に問題がある空間、収納場所が乏しく保育室の片隅に物が溢れてしまっている空間、といったケースも散見された。これらは建築雑誌等で紹介される竣工当初の姿では美しかった空間も、実際に使用される中で不都合が生じてしまっ

ているケースであり、そこで行われる保育の実態の把握や、その将来像に対する予測が不足していたことが原因であると考えられる。

6.今後の課題点

研究上の課題点として、多人数の研究者がそれぞれの専門分野の視点から空間を分析することが今回の手法であったが、少人数しか参加できない場合にはどうしても空間に対する切り口が少なくなってしまう問題点があった。これを防ぐために、訪問調査の際のチェックリストを作成して、少人数の訪問であっても多様な切り口で空間を分析できる手法を確立したい。また、訪問調査に当たっては数千枚の写真を撮影しているが、今回は紙面の都合で一部掲載できなかった。撮影した空間を「事例集」として発行することや、画像アーカイブの公開方法が今後の検討課題である。

〔謝辞〕

訪問調査にご協力いただいた、ふじようちえん、東京ゆりかご幼稚園、青松こども園、名古屋文化幼稚園、勝川幼稚園、椋山女学園大学附属幼稚園、鶴見大学短期大学部附属三松幼稚園、野中こども園、大中里こども園、明福寺ルンビニー学園保育園、幼稚園、こぼと絵本館、ゆかり文化幼稚園、Ricoh Future House コサイエの皆様、(株)環境デザイン研究所設計の四施設に対して紹介状をお書き頂きました、仙田満様に感謝申し上げます。

〔付記〕

文中に掲載した敷地、建築面積は書籍、web サイト、パンフレット等の情報から、室内の寸法や照度については現地で実測した数値を表記している。

〔注〕

鳥越けい子(1989)「サウンドスケープ概念の成立とその意義」、『音楽学』第34巻3号, pp. 163-177

加藤積一(2016)「ふじようちえんのひみつ」小学館, pp. 18-33

新建築編集部(2014)「特集 地域ごとの保育の場」、『新建築』第89巻7号, pp. 150-155

仙田満 藤塚光政(2016)「こどもの庭」,世界文化社,



図 1~4 ふじようちえん



図 5~8 東京ゆりかご幼稚園



図 9~12 青松こども園



図 13~16 名古屋文化幼稚園



図 17~20 勝川幼稚園

図 31~34 大中里こども園



図 21~24 梶山女学園大学附属幼稚園

図 35~38 明福寺ルンビニー学園保育園、幼稚園



図 25~26 鶴見大学短期大学部附属 三松幼稚園

図 39~42 ゆかり文化幼稚園



図 27~30 野中こども園

図 43~45 Ricoh Future House コサイエ